

「パンデミック」は、どの生命を救うかの問題でもある

最強ウイルスの「パンデミック」を取り上げた2夜連続の番組をご覧になった方々も多いと思う。

「パンデミック」とは、最強ウイルスが感染爆発、あるいは汎発流行する世界的な流行病に対する医学用語。

専門家の間では、核問題、環境問題での人類存亡の問題よりも、差し迫った問題はこの「パンデミック」であるという。

今、最も問題視されているウイルスは、高病原性鳥インフルエンザウイルス H5N1 型で、発生は時間の問題、短期間で大流行し、全身感染で数日後死に至ると恐れられている。現に、東南アジアでは集団感染発生が確認されているよう。

鳥インフルエンザウイルスは、鳥から人には感染しないと云われてきたが、ウイルス自体も進化しつつあり、鳥から人への感染能力を獲得し、強毒化しつつあるとか。

渡り鳥には国境はない。また、感染した潜伏期間の人が飛行機等で移動することから、世界的に爆発的に感染が拡大するという。

米国では既に国をあげて、治療薬の備蓄、人工呼吸器の備蓄にすら取り組んでいるという。

更には、流行時のワクチン、治療薬の投与・配布の優先順位、また流行時の人工呼吸器の不足から、終末期にある患者から人工呼吸器を外し必要とする患者への装着ガイドラインまで国民に提示されたとか。

初期提示案のワクチン投与の優先順位では、治療に携わる医療関係者が最優先であることは議論の余地はないが、子どもより高齢者が上位であったが、高齢者自身からの「自分達は、もう十分に長い間人生を味わってきた。次世代を担う子どもたちこそ優先すべき。」との声が政府を動かし、子ども優先の順位に変更になったとか。

さて、日本ではこうした議論は、どうなるのだろうかと思わざるを得ない。

「パンデミック」時の社会的な大混乱を避けるためにも、「人類存続における自分の生命とは？ 生きるとはどういうことか？」が、早急に各自に問われる時だと思う。

生命に軽重はないとはいえ、「パンデミック」時のワクチン投与、治療という瞬時に判断を求められる時、お金や立場、肩書きに関係なく、人類存続のためにどの年代の生命から優先するかのガイドライン議論が必要にならざるを得ない現代文明の中で、我々は生きていることをまず自覚することから論議が始まるような気がする。